文章訓練における模倣の効用

——修辞学者の言葉に拠りつつ——

香　西　秀　信

D.L.クラーク(Clark, Donald L.)は，ギリシャ，ローマの修辞学教育を研究した本のなかで，古代の修辞学教師は，その教育に，三つの方法を密接に関連させて用いたと述べている。[1)]その三つとは，

(1)優れた文章を書いたり巧みに話したりするための規則や技術を講義する。

(2)著名な弁論家や文章家のスタイルを模倣させる。

(3)様々なテーマについて，実際に文章を書かせたり演説をさせたりする。

であるが，本論文は，ギリシャ・ローマの修辞学教育のなかで，第2の方法—教育方法としての模倣—が，どのように機能し，また，修辞学の教師や弁論家達が，その方法について，どのような考えをもっていたかということを明らかにしようとするものである。本論に入る前に，

(1)修辞学の教育方法を調べることが，国語教育の研究に一体どのような意味があるのか。

(2)なぜ，その中で特に〝模倣〟という教育方法をとりあげるのか。

ということについて，若干の説明を加えておきたい。

(1)修辞学の国語教育への，最も一般的な貢献は，古典修辞学の理論を，作文教育（特に作文教授書）に応用することであろう。日本には，本来的な意味での rhetoric—説得を目的とした言論の技術—というものは殆んど育たなかったから，これを試みようとすれば，必然的に西洋修辞学の理論に頼ることになる。近代国語教育史上でも，不完全な形ではあるが，五十嵐力『新文章講話』（明４２），佐々政一『修辞法講話』（大６）等の立派な試みがいくつかあった。我が国の国語教育においては，修辞学を作文教育に応用しようとする試みは，その後全く跡絶えてしまったが，アメリカでは，１９４０年代のレトリック復興以来，大学のフレッシュマンイングリッシュの教師を中心に，修辞学の作文教育への応用が研究され，かなりの成果をあげている。

ところで，修辞学の国語教育への貢献は，単なる〝作文教授書〟の作成にとどまらない。修辞学は，本来は弁論術であるが，古代の弁論家は，政治弁論を行ったり，弁論術の研究をしたりするのと同時に，弁論術の教育にも大きな力を注いでいた。むしろ，弁論術の教育に，その時間と精力の大部分を費していたといってもよい。[2)]（修辞学は本来的に，教育されることを前提とした学問という特異な性格を持っている。）特に，ギリシャの直接民主制や，ローマ初期の共和制のような，自由な政治討論を許す政治環境が消滅して後は，弁論家は専ら弁論術（修辞学）の研究と教育に集中することになったのである。どの分野でも，実践活動が衰えると，奇妙にも理論研究が盛んになるものであるが，修辞学もその例外でなく，理論は非常に精密化され，その教育は益々盛んになったのであった。「逆説的ではあるが，ローマにおける政治弁論の衰退が，修辞学研究の新しい推進力となった」[3)]ということがいえるのである。

修辞学はその後，自由七芸（リベラル・アーツ）のひとつとして，中世に受け継がれ，千数百年にわたって西洋の人文主義教育の中心位置を占めることになった。修辞学は教育の最も重要な科目のひとつであったから，その教師になるには豊かな才能と学識が要求された。学問・教育としての修辞学がほとんど消滅しかけた十九世紀においても，「修辞学の教師になろうとするものは somebody でなければならなかった」[4]といわれている。そのような優秀な教師達が千数百年にわたって，修辞学の教育について様々な方法を考案し，論議をめぐらせたのである。修辞学は，言語教育の殆んど全領域を含むものであるから，言葉の教育の方法にある種の普遍性があることを考えれば，言語教育の本質的・基本的な論点は，既にその中に出揃っていると見ることができるであろう。現代の国語教育研究者は，その歴史を研究することによって，言葉の教育（の方法）に関する有益な助言を得ることができるのではあるまいか。（西洋では，国語教育にあたる分野の多くは，長年にわたって「修辞学科」の担当であった。）先に名前を挙げた D.L. クラークも，本職は大学の作文教師であるが，古代の修辞学の教育方法を研究したことが，大いに自分の仕事の役に立ったと述べている。[5]

(2)修辞学は，今述べたように，千数百年（ギリシャ・ローマを含めると約二千年）にわたって西洋の教育の中心であったが，その教育・訓練方法のなかで最も重視されたもののひとつであり，効果的な教育方法として代々に受け継がれてきたのが〝模倣〟であった。[6]ギリシャ・ローマの事情については後述するが，それから約千七百年後の，1758年に出版された，ジョン・ローソン（Lawson, John）の『弁論術講義』（Lectures Concerning Oratory）においても，模倣の有益性について説明するのに，講義一回分をすべて費している。「ここで，模倣—雄弁に至るすぐれた，要領のよい方法であり，特別の熟慮に値するもの—についてふれたい。……それ（模倣）について考えることは，我々が現在かかわっている一連の考察（弁論術）に特にふさわしい，適切なことであると思う。」[7]

西洋に限らず，どこの国においても，またいつの時代であっても，文章を学ぼうとするものは，先人の優れた文章を模倣するという方法を続けてきた。[8]また，文章に限らず，どのような技芸でも，その教育・訓練の過程にあって模倣という手段によらないものは，稀であろう。が，今日の国語教育では，タブーとまではいかなくても，〝模倣〟という言葉はかなりネガティブな意味を伴って受けとめられ，それが作文教育の方法としてまともに論じられることはほとんどない。[9]勿論，模倣が教育上有害であるというのならば，それはそれでひとつの国語教育論上の見解であるが，問題は，そのような見解が，模倣という方法を十分検討したうえでのことではなく，単に漠然とした個性尊重論からきているらしいところにある。個性尊重という考え方には，無論反対すべき理由はないが，しかし，実際問題として，模倣は本当に個性の芽を摘みとってしまう非教育的なものであるのか。このような問題は，抽象論として論じる限り，いつまでたっても論証を欠く永掛論のままであろう。もし，これを少しでも客観的に論証しようとするならば，結局は具体的な事実にあたってみるほかはない。すなわち，歴史上の現象（この場合は模倣練習の実践）を考察して，それがどのような意図で，どういう風に行われ，どういった結果をもたらしたかという事実の分析から始めなければならない。幸い，修辞学の歴史には，そのような分析に堪えうる

実践がいくつもある。先に本論文のテーマを述べたが，その研究意図はまさにここにあるのであって，修辞学の歴史のなかで，教育方法としての模倣がどのように機能し，また教師がその方法についてどのような考え方をもっていたかということを明らかにして，現代の国語教育研究者が，模倣という方法を考えるための材料のひとつにしたいと思うものである。なお，考察の対象とする時代を，古代ギリシャ・ローマとしたのは，この時代に修辞学の研究・教育が最も盛んであったこと，またその後の修辞学理論・教育の大枠がこの時代に定まっていること等の理由によるものである。

1

リチャード・マッケオン（Mckeon, Richard）が，1936年に，『モダンフィロロジイ』に寄せた論文によれば，古代ギリシャでは，模倣（mimesis）という言葉は，極めて多義な性格を持っていたが，今回ここで取り扱う（他人の文章や弁論のスタイルを）〝模倣する〟という意味は，〝mimesis〟の意味の中でも，比較的長い歴史を持ち，今日に至るまでその意味するところがあまり変化することのなかった例であるという。[10] このような意味での模倣の効用を論じている（現存する）最古の例は，イソクラテス（Isocrates）の『ソフィスト弾劾』（Contra Sopistas, 約390B.C.）に見られる。

> ……そして，教師は，彼の役目として，能うかぎりの正確さで，教えうるものは何も残さないほどに，徹底的に，その技術の原理を解説しなければならない。そして，次に教師は，彼の指導のもとに自己を形成している生徒が，彼を模倣することによって，最初から自らの弁論のなかに他人には見られない程の優美さと魅力とをもつことができるように，自分自身を（生徒たちの）弁論のモデルとしなければならない。[11]

イソクラテスは，ソフィストの流れをくむ弁論家で，修辞学がギリシャ・ローマの教育の中心となる基礎を築いた人物であり，紀元前393～392年頃，アテネに弁論術の学校を開いた。『ソフィスト弾劾』は，その学校の宣伝書とでもいうべきもので，自分の教育方針が，他のソフィスト達のそれと，いかに違うかを述べたものである。イソクラテスは，弁論術の理論や技巧は，講義だけでは身につかないとして，生徒に優れた弁論家のスタイルを模倣させることによって体得させようとした。模倣はイソクラテスの学校の主要な練習方法であり，彼の教育方法を特徴づけるものであった。イエーガー（Jaeger, Werner）によれば，イソクラテスの著名な（書かれた）演説は，彼の生徒がそれを模倣して技巧を習得するための範文となることを目的としたものであるという。[12]（※イソクラテスは，弁論家として著名であるが，声が悪く気が弱かったので，実際に演説を行ったことはほとんどないといわれている。彼は専ら書かれた演説によって弁論家としての名声を博した不思議な人間であるが，「ヨーロッパ文章道の始祖となって，その影響は今日の散文芸術の隅々にまで痕跡を止めている[13]」という。）

この模倣による練習は，特にイソクラテスの独創というのではなく，彼が先人のソフィストから受け継いで，自らの教育方法に組み込んだものであった。ソフィストの教育では，模倣のモデルは自分の教師に限られ，視写と暗記によって教師の弁論を正確に真似る，いわば教師の弁論を

再生するという方法がとられていた。イソクラテスも，自分の教師をモデルにすべきだという主張は同じである。が，彼も，様々な個性を持つ生徒に，一様に教師のスタイルをそっくりに模倣させていたのであろうか。『アンティドシス』（Antidosis, 約353 B.C）の次の記述，

……我々はどのような技芸や技術の分野でも，生徒を能うかぎり全く同じ様に（同じ腕前に）育てる人間を，最も熟練した教師とみなすが，これは万人の認めるところであろう……[14)]

からみる限りでは，イソクラテスにもそのような傾向があったように思える。が，各地を転々としながら，集中授業によって教育を行うという方式をとっていた他のソフィスト達に対して，イソクラテスは，自らの学校を固定し，生徒が通ってくることを要求するという方針をとっていた。その結果，イソクラテスの，他のソフィスト達には見られない教育上の特色のひとつとして，彼が自分の生徒達に個人的な関心を持つようになったということが指摘されており，[15)] それならば，生徒の個性に対する配慮もなされていたのではないかとも推測されるのである。ちなみに，キケロ（Cicero, Marcus Tullius）の『ブルトゥス』（Brutus 44.B.C.）に，次のような逸話が紹介されている。

……イソクラテスは，陽気なテオポンプスと，おとなしいエフォルスに対し，前者には手綱を，後者には拍車を用いたと語った……[16)]

我々のように，現代の教育に慣れたものには，このことは何でもない，当然の処置のように思えるであろう。が，教師と生徒が，その個性をなかだちとして，人格的に接触することの少なかった他のソフィストの教育と較べれば，イソクラテスのこのような教育方針は，まさに画期的なことであったのである。それゆえか，専門の文献学者の中からも，（文献から厳密に断定することはできないが）イソクラテスは，模倣に関してはそれ程厳格ではなく，（つまり一分のずれもなく模倣させるということはしないで），資質の異なる生徒に対する教授法のヴァリエーションを認めていたとする説が出されている。[17)]

以上のことをまとめると，紀元前四世紀頃までの弁論術の学校で行われた模倣練習には，大体次の様な特徴があったと認められるであろう。

①モデルは普通自分の教師に限られていた。

②そのモデルのスタイルを，そっくりに模倣するという方法がとられていた。（イソクラテスは，多少，生徒の個性に対する配慮があったと推測できる。）

修辞学の訓練としての模倣は，文学の方法論にも影響を与えた。古典学者のケネディ（Kennedy, George）は，ギリシャ人の文学的創造性に対する態度を，三つの時期に分けて考察している。彼によれば，プラトン（427—347 B.C.）の時代までは，文学は，インスピレーションが最も重要とされ，模倣は若干の教育的役割を果たしたに過ぎなかった。それが，四世紀（紀元前）になると，おそらくは修辞学のハンドブックの影響から，コンポジションの規則を公式化する試みがなされ，同時にインスピレーションが，あまり問題にされなくなった。そうして，後期ヘレニズムの時代に入ると，インスピレーションは，完全に模倣（この場合は古典文学作品の）に取って換わられたという。[18)]

2

紀元前８５年頃書かれた，ラテン語の最古の書物のひとつに，著者不明の，『ヘレンニウスに宛てたる修辞法』（Rhetorica ad Herennium）と呼ばれる修辞学の教科書がある。この本は十五世紀までキケロの作と信じられ，中世，ルネサンスを通して大いにもてはやされて，後世の著述家にも大きな影響を与えたもので，「修辞学の理論には何の貢献もしなかったが」[19]ヘレニズム風の修辞学をラテン語に移した，優れた修辞学の実践書であった。[20]

この教科書の，大きな特色のひとつは，これが模倣を，理論（規則）や実施練習と同格とみなした，（現存する）最古のテクストブックであるということである。[21]

……これ等すべての機能を，我々は三つの方法によって獲得することができる。（その三つとは）理論，模倣，実施練習である。理論とは，弁論の明確な方法や手順を与える一連の規則を意味する。模倣は，習った方法に従って，弁論術のモデルの効果的な技巧を獲得するように，我々を刺激する。実施練習は，精励を要する訓練であり，弁論の実際の経験である。[22]

だが，この教科書も，モデルに関しては，相変わらず，自分の教師を模倣すべきだという主張に立っている。そればかりか，自分の弁論をモデルとして提供するのは，弁論術の教師の（書物の場合は著者の）義務であるとして，次のような皮肉な言葉を付け加えている。

とりわけ，修辞学の著述家は，引用する例文によって，自分自身の修辞学における技量を証明すべきである。もし，ある商品を売っている商人が，こう言ったらどうだろう。「私の品物を買って下さい。尤も，今あなたに見せているこの見本は，他人から借りてきたものですが。」

……弁論術の教師達は，自分が教授している技術の模範を他から借りようとすることを，馬鹿げたことと思わないのだろうか……[23]

この教科書から約３０年後に書かれた，キケロの『雄弁家論』（De Oratore, 55 B.C.）では，このあたりの事情はどうであろうか。キケロは，ローマの弁論家でありかつ政治家，およびエッセイストでもあるが，この『雄弁家論』は，彼の修辞学関係の著作の代表作であって，その雄弁術に対する考えが集約されている対話篇である。キケロには，具対的な模倣のあり方について，はっきりとした指示を与えている文章はないが，『雄弁家論』第二巻８７—９７節には，彼の模倣に対する考えが，多少まとまった形で出てくる。そこでの議論は，大きく次の二つに分けられる。

(1)実際に模倣を行った人間の体験談二つ。良い指導を受けて成功したスルピキウスの例と，逆に自己流で失敗したフフィウスの例と。

(2)ギリシャの弁論術の簡単な歴史。—キケロは，ギリシャの弁論術は模倣によって発展したと主張している。

第一部は，スルピキウスの弁論の改善に関する話から始まる。スルピキウスは，弁論家に必要な才能と条件を，ほとんどすべて持ち合わせていたが，生来の性格から喋り方が早口でがむしゃ

らという欠点があった。これに対して，アントニウスは，教師（弁論のモデル）を換えることを提案し，彼の資質を考えて，そのモデルにクラッススを推薦した。一年もたたないうちに，スルピキウスは，クラッススの雄大で華麗な弁論を自分のものにし，全く見違えるような弁論家に生まれ変わった。

何故スルピキウスは成功したのであろう？それは，彼が，正しいモデル—その弁論のスタイルが彼自身の資質と合っているような人物（この場合はクラッススス）を模倣したからである。先に述べたように，キケロには，模倣のあり方に関する具体的な記述はないが，この部分は，キケロが正しい模倣の方法を暗に指示したものである。

スルピキウスの体験に基いて，キケロは，模倣に関する一般的原則を，アントニウスに代弁させている。

第1—自分の資質・個性に合った弁論のスタイルをもつモデルを模倣すべきである。（スルピキウスの場合はクラッススス）

第2—そのモデルのスタイルを注意深く分析して，特に優れている所だけを真似るべきである。—これはあたりまえすぎる忠告のようであるが，決して容易なことではない。多くの人間は，あるモデルのスタイルを模倣するのに，長所を真似ようとせず，簡単に真似できる部分，癖や人目を引く特徴など—それらは欠点であることが多い—を真似ようとする。そのような特徴は，当人においては，大きな魅力となりうることもあるが，他人がそれを真似すると，必ず誇張して醜い欠点としてしまうものである。

スルピキウスの体験談の後，counter — example として，フフィウスの失敗談が語られている。彼は，まさに二重の意味で，今あげた原則に違反していた。

第1—フフィウスは，ガイウス・フィムブリアを模倣したのであるが，これは資質的に，彼と全く異った弁論家であった。「彼は，自分が最も似せようと努めるモデルを，どの様にして選ぶのか知らなかった。」[24)]

第2—彼は，モデルを注意深く分析してその長所を真似ようとせず，ただそれの人目を引く特徴を真似た。が，「彼が真似ようとして選んだものは明らかに欠点であった。」[25)]

この話の後に，キケロ（アントニウス）は，もう一度，先程の原則を繰り返している。すなわち，モデルの選択に注意せよ。そしてその後は，そのモデルの最も良い部分のみを得るように努めよ，と。

ここで，突然，キケロは話をひととびさせて，どうしてギリシャの弁論術は，あのように発展したのかという問題を提出する。キケロの解釈によれば，それは，それぞれの世代が，前の世代の卓越した弁論家のスタイルを模倣した結果であるという。この考えに基いて，彼は，ペリクレスからのギリシャの弁論術の歴史をたどる。その中で，模倣を重視し，多くの優秀な弟子を輩出させたイソクラテスは，特に大きく取り挙げられている。……ギリシャの弁論術が模倣によって発展したというキケロの説が真実かどうか，それを文献学的に判断する力は筆者には無い。ある文献学者によれば，キケロのこの説は無理があり，その論理には petitio principi（先決問題要求の虚偽）が見られるという。[26)]そうかも知れない。が，キケロの述べている内容が，果たして

真実かどうかということは，ここではさして重要ではない。大切なのは，キケロがそのように解釈し，そのように語っているという事実である。彼が，模倣に関する体験談を二つ述べた後，突然ギリシャの弁論術の歴史に話を進めたのは，ギリシャの弁論術が模倣によって発展したのであるから，ローマ人も，自らの優れた先人のスタイルを模倣することによって，自国の弁論術を発展させることができるということを主張しようとしているにほかならない。彼は，この部分で，同時代のローマ人に，模倣の価値を説き，それを推奨しているのである。

『雄弁家論』第二巻８７—９７節の議論は，前の時代と比較して，大きな違い（あるいは進歩）がみられる。その部分を中心にしてまとめてみよう。

①前の時代には，模倣のモデルは，自分の直接の教師であるのが普通であった。それに対してキケロは，自らの資質・個性に合わせてモデルを選択すること，自分に合わなければ何度でもモデルを換えるべきであることを主張した。

②その選んだモデルのスタイルを，かつての時代のように，正確に，そっくり真似るのではなく，その特徴を注意深く分析し，優れていると思われる部分のみを模倣せよと薦めた。『雄弁家論』の後に書かれた『ブルトウス』の６８節にも，同様の主張が見られる。キケロは，そこで，ブルトゥスに，カトーの文体を模倣するように薦めるのであるが，その際に，カトーの粗野な言葉遣いを改め，リズムを加え，全体の配列を直して，文体がよりなめらかになる様にせよと注意している。[27] これは多少極端な例で，ここまでくればもはやもう〝模倣〟という必要もないほどであるが，キケロの，模倣（の方法）に対する考えがよくあらわれていると思う。

①，②でまとめたような考えは，勿論キケロが最初に述べた訳ではないであろう。彼の時代には，弁論術の学校では，既にここに述べたような方法を採っていたものと思われる。そして，このような傾向が一般となってくると，修辞学（弁論術）の教師達は，モデルの選択と分析に，その全精力を傾ける様になった。今日，我々がギリシャ・ローマの文芸批評と呼んでいるものは，そのような，模倣のためのモデル探しとその研究の中から生まれてきたものであるという。[28]

3

キケロは，『雄弁家論』のなかで，自分自身の模倣に対する考えを，対話篇の登場人物に代弁させただけで，その具体的な方法にはふれなかった。それについて知ろうと思えば，我々は，クィンティリアヌス（Quintilianus）の『弁論家の教育』（Institutio Oratoria, 95－96 A.D.？）の記述に俟たねばならない。クィンティリアヌスは，７１年から９１年までローマの欽定講座の修辞学教師をつとめた弁論家であり，『弁論家の教育』は，その修辞理論，教育論を集大成したものであるが，同時に，体系的な模倣（による訓練）について，おそらく初めて語ったラテン語の書物でもある。[29]

クィンティリアヌスは，修辞学の教師としては非常に高い名声を得たが，弁論家としての人生は不幸であった。政治体制の変化（共和制→帝政）によって，自由な政治討論を許す条件が消滅し，彼の生きた時代は弁論家にほとんど活動の場を提供しなかったのである。このような条件の下で，修辞学自体もその性格を変えざるを得なかった。もともと修辞学には「実用科目」と「教

養科目」の二つの側面があったが，本来はやはり実用の学であった。キケロは弁論家に，小手先だけの技術よりも，深い学識と優れた人格を要求したが，これは彼の，「雄弁を欠く英知は無益であり，英知を欠く雄弁は有害である」[30]という信念に基くもので，実用面を無視したものではなかった。ところが，クィンティリアヌスの時代になると，修辞学はその実用の場を失い，純粋な「教養科目」に変わりつつあった。かつては政治と密接な関係にあった修辞学が，文学との結びつきを強くし始めたのもこのころからである。このような状況において書かれた『弁論家の教育』の中で，模倣は一体どのように捉えられているだろうか。クィンティリアヌスは，第十巻の第1章で，弁論のモデルになるようなギリシャ・ローマの古典作家を概観した後，第2章で，模倣についての本格的な論議に入る。第2章は，模倣についての簡単な三つの議論から始まる。

第1—ある技芸を習得する過程での我々の仕事の大部分は模倣にある。まず最初に発見（発明）することがあり，それが最も重要なことであるにしても，発見された良いものに倣うことは有益なことである。

第2—他人の中の優れていると認めたものに従おうとすることは，我々の生活の普遍的習慣である。それ故，「子供達は文字をおぼえようとして手本の形をなぞり，音楽家は教師の声の後に続き，画家は先人の作を模写し，農夫は実際にたしかめられた農業方法に従う……[31]」

第3—我々は良いものに似ているか似ていないかのどちらかでしかあり得ない。自然にその様な類似を示すようになることは滅多にないが，模倣することによって，それはしばしば達成できる。

これらはいずれもあたり前のことを言っているにすぎず，模倣の価値を説くのに，それ程説得力のある議論とも思えない。むしろ，彼の筆が生彩を放ってくるのは，4節以下の模倣に対する辛辣な批評が始まってからである。この部分も，次の三点にまとめることができる。

第1—模倣はそれだけでは不十分なものである。他人によって創り出されたものに満足しているのは，怠惰な知性の持ち主だけである。もし，模範に従う以上に，我々が何もしなかったら，世の中はどのようになっていたであろうか。「詩においては，リビウス・アンドロニクス以上のものをもたず，歴史では，ポンティフェクスの年代記がその極致であり，我々は今もって筏で航海し，絵画は，陽の光の中に投影されたものの影をなぞるだけのものに限られていたであろう[32]」

第2—どのようにうまく似せても，模倣したものが，実物に劣るのは，避けられない自然の道理である。「例えば，影は実物に，肖像画は元の顔に，役者の所作は現実の人間の情動に劣るのである。[33]」

第3—（弁論において）最も重要なものは模倣することのできないものである。生まれつきの才能，創造力，勢い，流暢さ—これらは模倣では獲得することができない。

以上は模倣の限界について述べたものといってよい。模倣の価値についてはありきたりの説明ですませながら，何故その限界については，4節から13節までを費して長々と議論しているのか。それは，おそらく，クィンティリアヌスの時代には，模倣は既に一般に認められた方法で，今さらその価値を説く必要がなかったこと，また，そのように模倣による訓練が盛んになってくるにつれて，ある種の教育上好ましくない傾向—学習の手段であることを忘れた模倣のための模

倣のような—が現れていたことを示すものであろう。この後，１４節以下で，クィンティリアヌスは模倣を成功させるための必須条件を述べているが，それは次の二つである。

第１—誰を模倣するかについてよく考えよ。

第２—そうやって選んだ著作家（モデル）について，我々がそれに自分を合わせて模倣すべき点はどこかということを，十分に検討せよ。

言っまでもなく，これらは先に述べたキケロの意見と全く同じである。クィンティリアヌスの時代にも，この二つの原理を無視するものが多かったのであろう。彼等は，自分に合ったモデルをどのようにして選ぶか，また，選んだモデルの特質をどのように分析するかを知らず，ただ同時代の際立った弁論家に遮ニ無ニ自分を似せようとする。その結果，彼等の弁論は，「美点に極めて似た欠陥を持つ様になる。」かくて「……雄大になるかわりに仰々しくなり，簡潔になるかわりに単調になり，力強くなるかわりに向こう見ずに……」[34]なってゆくのである。これら二つの原理を守るためには，まず自分の資質・個性をよく認識しなくてはならないとクィンティリアヌスは述べる。「繊細な性質のものが，荒々しい弁論を真似るほど，見苦しいものはない。」[35]

ここで，クィンティリアヌスは，キケロのふれなかったことに注意を促す。多くの学生のおかす誤りであるが，特定の文体の模倣に没頭した人間は，しばしばそのモデルと違う分野にも，その文体を持ち込もうとする。例えば，ある作家の荒々しい文体が気に入ると，軽い，流れる様な文体が要求される時までも，それですまそうとする。逆に，単純で気楽な文体が気に入ってしまうと，激しくて重々しい調子が求められるような場合にも，それを用いようとする。

このような誤りをなくすにはどうすればよいか。クィンティリアヌスは，モデルを一人に限定して継続して模倣することをしないで，複数のモデルを模倣せよと奨めている。なるほど，確かに，全てのことをキケロが語る様に話せたらすばらしいことであろう。しかし，「自分の選んだ一人のモデルを完全に真似るということは，実際的に人間には不可能である以上，多数の異なったモデルを目の前において，それぞれの作家のそれぞれの長所をしっかりと自分のものにして，様々な場面に最も適したものを用いていく様にすべきなのである。」[36]

ところで，この時代には普通の模倣練習の他に，模倣的な練習と考えられていた修辞学の訓練があった。翻訳，パラフレーズ等であるが，それについても少しふれておこう。翻訳はキケロの非常に好んだ練習であった。彼は，『最高の種類の弁論家について』（De Optimo Genere Oratorum, 46 B.C.）の中で，自らの体験した方法について述べている。

> ……すなわち，私は，アッティカの弁論家の中で最も雄弁な二人，アエスキネスとデモステネスが互いに相手に対して行った，二つの有名な演説を翻訳した。私は，そこで，思想や形式，いわゆる思考の〝綾〟といったものを保ちつつ，言葉だけを自分の母国語に置きかえた。つまり，翻訳者としてではなく，弁論家としてそれを翻訳したのである。そしてその中で，私は，必ずしも逐語訳にこだわらず，全体のスタイルと，言葉のもつ力強さを保とうとした。何故なら，私は，それらを，お金のように額高を一致させるのではなく，いってみれば，重さを同じにして読者に渡すべきであると考えていたからである。[37]

同様に，キケロは『雄弁家論』の中でも，クラッススに翻訳について代弁させている。

その後，私は，大きくなってから，ギリシャの最も卓越した弁論家の演説を自由翻訳するという練習に従うことを，決意した。そうして，ギリシャ語で読んだことをラテン語に直していくという作業を続けていくうちに，私は，自分が，最も適した言葉—しかも普通の表現で—を使っているのみならず，新しい言葉—最適のものであるが，ローマ人には目新しい—を類推によって作り出していることに気づいた。[38)]

キケロの時代は，翻訳は，ある意味では必然的な方法であった。何故なら，当時は，優れた弁論家を模倣しようと思えば，どうしても，ギリシャの弁論家を模倣するしかなかったからである。ただ，当時のローマは，一種のバイリンガル社会で，学校でもギリシャ・ラテンの二ケ国語を用いて授業が行われていた程であったから，[39)]共に語感の理解できる二言語間の翻訳は，言語感覚の養成に大いに役立ったであろうと思われる。

クィンティリアヌスは，翻訳を有効な手段と認めてはいるが，キケロに較べて幾分形式的である。彼の時代には，もう弁論のモデルをわざわざギリシャから選ぶ必要がなくなっていた。クィンティリアヌスの記述から見て，おそらく彼の時代には，もはや翻訳は学校での正規の練習ではなくなっていたのではないかと推測される。[40)]

クィンティリアヌスは，むしろ，ギリシャ語からの翻訳よりも，ラテン語からラテン語への翻訳，すなわちパラフレーズの方を，より有益と認めている。これに対し，キケロは，若いうちこそパラフレーズを勉強したが，後にそれを有害なものとして棄ててしまった。『雄弁家論』から，クラッススに代弁させている彼の反対意見を見てみよう。

……しかし，後になって，私は，この訓練の欠陥に気づいた。というのは，私がエニウスの詩のパラフレーズを練習している時でも，あるいはそれがグラックスの演説である場合でも，主題に最も適した，最も優雅な，すなわち最高の言葉は，すでに作者によって使われてしまっているのである。だから，私は，同じ表現を使ったのでは何もならないしかといって他の表現を使うとそれでは明らかにだめになってしまうと感じたのであるが，そうしているうちに，あまり適当でない言葉を使う習慣を身に付けてしまったのである。[41)]

クィンティリアヌスは，この見解に真っ向から反対する。

しかし，私としては，パラフレーズを単なるオリジナルの解釈とは思っていない。むしろそれは，原著者の競争者になって，同一の意味をめぐって，原著と表現上の闘いを演ずることであると思う。だから，私は，学生にラテン語の弁論のパラフレーズを禁ずる人々には賛成しない。彼等は，最高の表現が既に使われている以上，異った表現をすれば，必ずより劣ったものになるからだというのである。……弁論の力とは，もし何かが言われてしまったら，同じ主題では，もう他に何も言うことができないほど，せせこましいものであるのか。……実際には，我々に残された表現の方法は無数であり，同じ目標に多くの道が通じているのである。

他人のものを真似るだけでは不十分と，模倣を批判したクィンティリアヌスにとっては，パラ

フレーズこそ最も好ましい練習方法であった。パラフレーズによって，我々は，モデルをただ模倣するのではなく，それと表現の闘いを演ずるのである。クィンティリアヌスは，同様に，他人の書いたものを言い換えるだけではなく，自分の書いたものを他の言い方に換えてみることも試みてみよと薦めている。

ここで，本章の結びとしてクィンティリアヌスの議論をまとめてみよう。

①クィンティリアヌスも，キケロと同じように，模倣のための必須条件を，モデルの注意深い選択と，そのスタイルの精密な分析においた。

②様々な分野，場合に最もふさわしい文章を書く（弁論を行う）力を身につけるために，一人の人間に限定して真似るよりも，多くの文章家（弁論家）の長所を模倣して自分のものにするようにと説いた。

③模倣すればそれで足れりとするのではなく，模倣はそれ自身では不十分なもので，単なる学習の一方法にすぎないとするなど，その限界と危険性を十分に認識していた。

最後に，本文ではふれなかったことであるが，古代の教師達は，模倣を単なる言語表現に制限していなかったということをつけ加えておきたい。古代の教師達は，生徒と共に古典を読む時には二つの意図をもっていた。ひとつは，生徒に文章表現の模範を与えることであるが，もうひとつは，彼等に，古典を読ませることで，人間の生き方についての倫理や作法の模範を与えることであったという。[43)]

結　　語

古代の修辞学教育の中で模倣が占めていた地位とその重要性については，本文中に述べた通りであるが，キケロ，クィンティリアヌス等の代表的な修辞学者は，この方法（模倣）について，極めて健全で穏健な態度を持っていた。模倣という方法に対しては，いろいろと厳しい反発があるが，その主たるものは，「個性尊重論」および単なる言葉の〝モノマネ〟に対する嫌悪感によるものである　しかし，キケロやクィンティリアヌスが主張した原則，①自分の個性・資質に合ったモデルを模倣せよ②そのモデルを注意深く分析して，特に優れていると思われる部分のみを真似よ③模倣は目的ではなく，単なる補助手段にすぎないことを認識せよ，は，修辞学教育のなかの模倣が，少なくともその出発点においては，例えば我が国の明治時代に見られたような範文模倣による美文の作製とは全く違った性質のものであったことは，容易に理解できよう。（少なくとも出発点においては，と断ったのは，修辞学の歴史の中で，ルネサンス期の「キケロ主義」[44)]に見られるように，模倣の最も悪しき形態が現れ，問題となったことがあるからである。）

修辞学は，二千年間西洋の教育の中の一科目として，実際の教育と共に歩んできた。云わば，常に実践の側のチェックを受けてフィードバックされていたわけであるから，有害なもの，無益なものは当然捨てられ，廃止された筈である。この中で，模倣が，効果的な訓練方法として代々受け継がれてきたことは，その教育的有効性を証明するひとつの証拠であるといえるであろう。現代の国語教育研究者は，模倣の教育的価値についてもう一度よく考えてみるべきである。大人びた文章を書く子供が必ずしも伸びるとは限らないとは，よく聞く科白であるが，あまりそれを

気にしすぎると，今度は子供じみた文章しか書けない大人がでてくるのではあるまいか。

〔注〕

1） Donald L.Clark, *Rhetoric in Greco－Roman Education*, Columbia U.P.,(1957)1959 preface viii

2） Donald L.Clark, *Rhetoric in Greco–Roman*, p 59

3） Peter Dixon, *Rhetoric*, Methuen & Co Ltd, (1971) 1977, p 45

4） Richard M.Weaver, "Language is Sermonic" in Richard L.Johannesen ed., *Contemporary Theories of Rhetoric: Selected Readings*, Haper & Row, 1971, p 164

5） Donald L.Clark, *Rhetoric in Greco－Roman*, preface ix

6）修辞学理論のなかで，特に模倣を教育方法の中心におく流れを，Formulary Rhetoric と呼ぶ。
cf. Wilber Samuel Howell, *Logic and Rhetoric in England*, 1500－1700, Russell & Russell, (1956) 1961, pp 138－145

7） John Lawson, *Lectures Concerning Oratory*, (1758), reprint, E.N. Clausse and K.R. Wallace eds, Southern Illinois U.P., 1972, pp 108－109,

8）フランクリンやスチーブンソンが大家の文章を模倣して名文家になった話は有名であるが，日本でも，修業時代の梶井基次郎や若杉慧が志賀直哉の文章を筆写して勉強したことはよく知られている。

9）アメリカでは，Edward P.J. Corbett, *Classical Rhetoric for the Modern Student*, Oxford U.P., (1965)1971, や Richard M. Eastman, *Style : Writihg as the discovery of outlook*, Oxford U.P.,1970, のような，模倣を積極的に肯定した作文教科書がいくつもある。

10） Richard Mckeon, "Literary Criticism and Concept of Imitation in Antiquity" *Modern Philology*, 34, 1936, p 26

11） Isocrates, *Against the Sophists*, tr. by George Norlin, Loeb Classcical Lib–

rary, (1929) 1968, 17–18

12) Werner Jaeger, *Paideia : The Idea of Greek Culture*, tr. by Gilbert Hight, Oxford U.P., (1945) 1947, Vol 3, p65

13) 田中美知太郎『ソフィスト』（講談社学術文庫，昭和５４年，128頁）

14) Isocrates, *Antidosis*, tr. by George Norlin, Loeb Classical Library, (1929) 1968, 205

15) George Kennedy, *Classical Rhetoric and Its Christian and Secular Tradition From Ancient to Modern Times*, Univ. of North Carolina Press, 1980, p 32

16) Cicero, *Brutus*, tr. by G.L. Hendrickson, Loeb Classical Library, (1939) 1971, 204

17) Elaine Fantham, "Imitation and Evolution: The Discussinn of Rhetorical imitation in Cicero De Oratore 2. 87–97 and Some Related Problems of Ciceronian Theory" *Classical Philology* 73, 1978, pp 11–14

18) George Kennedy, *The Art of Pursuasion in Greece*, Routledge and kegan Paul, 1963, pp 332–333

19) Peter Dixon, *Rhetoric*, p 21

20) この教科書については，ラウブ古典叢書のハリー・キャプラン氏の解説（のち，Harry Caplan, *Of Eloquence : Studies in Ancient and Mediaevel Rhetoric*, Cornell U.P. 1970, pp 1–25 に所収）が参考になる。

21) Donald L. Clark, *Rhetoric in Greco–Roman*, p 10

22) anonymous, *Rhetorica ad Herennium*, tr. by Harry Caplan, Loeb Classical Library, (1954) 1977, I.3

23) anonymous, *Rhetorica ad Herennium*, Ⅳ.9

24) Cicero, *De Oratore*, tr. by E.W.Sutton, Loeb Classical Library, (1942) 1979, II. 91

25) Cicero, *De Oratore*, II. 91

26) Elaine Fantham, "Imitation and Evolution", p 10

27) Cicero, *Brutus*, 68

28) Donald L. Clark, "Imitation : Theory and Practice in Roman Rhetoric," *Quarterly Journal of Speech*, 37, 1951, p13

29) Elaine Fantham, "Imitation and Decline;Rhetorical Theory and Practice in the First Century after Christ" *Classical Philology*, 73, 1978, p105

30) Cicero, *De Inventione*, tr. by H.M. Hubbell, Loeb Classical Library, (1949) 1963, I.1

31) Quintilian, *Institutio Oratoria*, tr, by H.E.Butler, Loeb Classical Library, (1922) 1979, X.II.2

32) Quintilian, *Institutio Oratoria*, X. II.7

33) Quintilian, *Institutio Oratoria*, X. II.11

34) Quintilian *Institutio Oratoria*, X. II.16

35) Quintilian, *Institutio Oratoria*, X. II.19

36) Quintilian, *Institutio Oratoria*, X. II.26

37) Cicero, *De Optimo Genere Oratorum*, tr. by H.M.Hubbell, Loeb Classical Library, (1949) 1968, 14

38) Cicero, *De Oratore*, I. 155

39) cf. Aubrey Gwynn, *Roman Education from Cicero to Quintilian*, Russell & Russell, (1926) 1964, pp 92–94

40) cf. M.L. Clarke, *Higher Education in the Ancient World*, Routledge & Kegan paul, 1971, p 38

41) Cicero *De Oratore*, I.154

42) Quintilian, *Institutio Oratoria*, X.V. 5–7

43) Donald L. Clark *Rhetoric in Greco–Roman*, p 144

44) キケロ主義については，イゾラ・スコット氏の仕事が参考になる。Izora Scott, *Controversies over the Imitation of Cicero*, (1910). AMS Press, 1972, Scott, in Monrow ed., *A Cyclopedia of Education*, 1911，また，エウジェニオ・ガレン『ヨーロッパの教育』（近藤恒一訳，サイマル出版会，1974）も面白い。